

# act

art, culture, tradition

30

[発行] 札幌市教育文化会館  
アクト第30号

February 2019



教文ワークショップ事業①

## 子ども演劇WS

Children's Theater Workshop



## 小・中学生が札幌の実力派劇団と名作に挑戦

舞台芸術に触れることで次世代の表現者や愛好者を育成することを目的に始まった子ども演劇ワークショップ事業。公募によって集められた小・中学生の参加者が、札幌を中心に活躍する劇団と共に、長期間のワークショップを通じて作品を制作します。2016年度にスタートし、これまで『わが町(作: ソートン・ワイルダー)』『ローリング・ストーン(作: 野田秀樹)』といった不朽の名作を上演。今年度はW.シェイクスピアの『夏の夜の夢』を大幅にリメイクした作品に挑戦します。



# 音楽劇『わが町』

2017年3月25・26日

アメリカの劇作家ワイルダーの名作を、札幌を舞台にリメイク。「来週本番だけど、まだセリフが入ってない」などハラハラすることもありつつ、観客の人生を照らすような物語を子どもたちが演じきり、温かな感動を呼びました。



# 『ローリング・ストーン』

2018年3月25日

原作は野田秀樹。「演劇人から、野田作品をよく子どもたちとやるねと驚かれました」と演出の南参さん。戦争と愛に振り回される人々と石たちの記憶を巡るシリアスな物語を20名の子どもたちとyhsの役者7名が熱演し、大きな拍手を受けました。



INTERVIEW

子ども演劇ワークショップの3年間を振り返る

2016年度から始まった子ども演劇ワークショップ(WS)事業。初年度から演出を担当する南参さんと、札幌市教育文化会館のスタッフとで、試行錯誤の3年間を振り返り、手応えや課題について語っていただきました。

一まずは南参さんから、3年間を振り返っていかがでしたか？

南参:小学生と演劇をつくるのが初めてだったので、1年目は子どもたちがいかに楽しく参加できるかを一番に考えていました。2年目は、子どもたちが自発的に稽古に参加でき、よりチャレンジもできる作品にしようと、野田秀樹さんの「ローリング・ストーン」を選んで。継続組の子どもたちは1年間の蓄積がすでに見られて、率先してセリフを覚え、稽古に集中して臨んでくれたので、すごく助かりました。この発表公演では、本番前に最後のアドバイスをしたときの、子どもたちの目の輝きがすごく印象に残っています。みんな「これからやるぞ!」という自信に満ち溢れた目をしていて、感動しました。3年目の今年は、最初に「今回はどういうことをやりたい?」って全員にリサーチをして、原作を元にオリジナルの作品をつくることになりました。経験者の子たちは演技を見る目も肥えてきて、稽古中も他の子の演技に対して良いアドバイスを言ってくれる。とても頼もしいし、嬉しいです。

一今年度は、演劇WSファシリテーターによるWSの回もあったそうですね。



教育文化会館(以下、教文):はい。もともとWS+発表公演事業には、「舞台作品づくりを体験する場」と、そのような体験を通して「自己成長の場」へつなげていくという目標がありました。ただ、「自己成長の場」を子どもたちの自発的な発想や自ら考える力の向上の場と捉えたと、その役割までを演出家の南参さんに担ってもらうことに対して疑問も感じていたんです。そんな時に世田谷パブリックシアターの演劇WSファシリテーターのことを知って。演出家や脚本家といった実演家と、ファシリテーターの役割は違うのではないかと気づき、平成29年度に演劇WSファシリテーターの役割や必要性を学ぶための講座を開催しました。身体や声を使ったゲーム、美術的、音楽的な要素を組み合わせながら、参加者と「どんな演劇にしていこうか」共に考え、形にしていく手法を実際に体験でき、事業設計を考える上でとても参考になりました。そこで、今年度は子ども演劇WSの特別編として演劇WSファシリテーターが講師の回を設定し、子どもたちや南参さんたちに彼らのWSを体験してもらいました。

南参:ファシリテーターの方々は、ゲームなどの引き出しの多さはもちろん、その場に合わせた柔軟に変えていく組み立て力がすごいと思いました。あと僕たちのWSだと、大人は基本的に静観して意見はそんなに出不さないけど、ファシリテーターのWSでは大人も結構意見を言うんですね。この辺のさじ加減というか、大人のアシスタントも子どもたちと同じ目線になる感じがすごく上手いなと思いました。

教文:南参さんからは2年間やってみて難しかったところなどが課題として出てきていたので、その課題解決の一つの選択肢として、演劇WS

ファシリテーターの手法を知ってもらえればという狙いもありました。

南参:基本的に学校だと指示待ちしてしまうことが多いし、演劇部であっても大半は顧問や演出家がつくり上げるスタイルで、子どもたちも間違っちゃいけないという意識が強い。演劇は稽古の段階では失敗を恐れず何をやってもいいし、何が成功か失敗かはその時点ではわからないんだけど、そういう頭に切り替わるまでが大変で... 1年目はそこが難しかったんです。3年目はファシリテーターによるWSもあったし、経験者の子は今までの蓄積もあって自発的にいろんなことを発信できるようになってきた。ファシリテーターのWSは、例えば子ども演劇WSの最初に、子どもたちと大人が演劇をつくる時の姿勢や考え方を共有するための装置としてあると、すごくいいような気がしています。

一舞台作品づくりと「自己成長の場」という教育的な要素のバランスについてはどう思いますか？

南参:どちらに重きを置かずかです。本人の成長を考えるといいのかもしれないけど、作品の質を考えた時に演出家として断らなければいけない場面はどうしても出てくるし、そのジャッジや方針が演出家とファシリテーターでは異なってくるのだと思う。

一子どもたちにヒアリングすると、ファシリテーターによるWSでアイデアを出しながら自分たちで作品をつくった経験を、南参さんとの稽古に活かしていることが、成長の実感につながっているみたいです。

南参:最終的には人の成長と作品の成長が両方絡み合うとは思いますが。見どころがわかって意見を出していけば作品の質も上がるし、他の人のことを見ることができるとコミュニケーション能力の向上につながる。あとは1年2年と稽古を通して、子どもたちの中に基準がだんだ



んでくることによって意見を出しやすくなる場所もあるから、やっぱり大変なのは最初だと思います。

一子ども演劇WSに3年間関わってきて、その意義についてはどのように考えますか？

南参:中学校は演劇部のないところが圧倒的に多いし、ましてや小学生だと演劇をする機会が本当に少ないと思う。子ども演劇WSはその年代の子たちの受け皿になっているし、子どもの頃から演劇に親しみを持ってもらえる、ありがたい機会だと思います。最初はおとなしかった子どもが徐々に意見を出せるようになったり、笑顔が増えていったりすることがたくさんあって、教育的な面でも意義を感じています。小学生と中学生と一緒に演劇をつくる機会もなかなかないですよね。大人も含めると、だいぶ幅広い世代の人が、お互いを認め合いながら一緒に一つのことを真剣につくる場になっているので、すごくいいと思います。

PROFILE

南参 Nanzan



1997年、札幌で劇団「yhs」を結成。世の中のさまざまな物事を独自のユーモアによって切り取る脚本と、俳優たちの個性を最大限に活かした演出で評価を受けている。創り出す舞台のジャンルは幅広く、社会派的なシリアス劇から、とことんバカバカしいコメディ作品まで、どん欲に創作活動を行っている。現在、日本劇作家協会北海道支部・副支部長。

ワークショップ(WS)事業をアップデート!

平成29年度の演劇WSファシリテーター養成講座、ファシリテーターによるWSを特別編として子ども演劇WSに組み込んだ平成30年度など、WS事業をより充実させるための取り組みを進めてきた札幌市教育文化会館。キーとなる「WSファシリテーター」とは？

ワークショップ・ファシリテーターって？



教文スタッフN谷

一般的に「進行役」「促進役」と言われ、集団活動そのものに参加する役割ではなく、中立的な立場の存在を指します。演劇WSファシリテーターであれば、演劇活動の経験があるに越したことはないけれど、演劇に対する実演家としてのスキルより「プランニング力、考えを言語化する力、相手の考えをくみ取る力」などがより重要になってきます。

ファシリテーターによるWSは、職員にとっても発見が多数!



教文スタッフK島

WSの内容によっては、講師だけでなく職員も進行に関わる場合があるので、ファシリテーターによるWSで参加者に対する手助けの仕方などを見ることができ、とても参考になりました。実際にWSに入って参加者とコミュニケーションすることで、アンケートだけではわからない感想や反応もわかり、より充実したフィードバックにつながります。ファシリテーターの手法は職員にとっても学びが多いですね。

ファシリテーションのやり方は、WSに限らずいろいろなジャンルの仕事を進める上で役に立つと思います。リーダーではなく進行役として、グループの合意形成を図りながら一つのものをつくり上げていく手法は、とても勉強になりました。



教文スタッフK島

ファシリテーターによるWS体験を、未来へのタネまきとして捉える。



教文スタッフN谷

参加者なり講師の方々の中に、ファシリテーターによるWSでの体験がタネとしてまかれ、そこで得たものを後々どこかで活かす機会が訪れれば、それでいいと思っています。今後も、各事業を設計する際の補完的な選択肢の一つとして、ファシリテーターによるWSを考えていきたいです。

LOVE・子ども演劇ワークショップ

ある日の稽古終了後、子どもと大人に突撃インタビュー。

発表公演が終わってないので総括はできないけれど、3年間の感想や、子ども演劇WSへの思いを聞いてみました。



小林エレキ(yhs)

演技に立ち向かうための基本的なことを、遊びながら伝えてくれたらいいなと思って日々参加しています。3年間で子どもってすごく成長するもんだなあと感じています。



最上怜香(yhs)

WSでは全力でトライしたり失敗したりする姿を率先して見せたいなと思っています。「正解はいろいろあっていい」ことを、演劇を通して子どもたちに知ってほしいな。



宮島悠滋(中2)

毎年作品の作風が全く違って、つくることが楽しいです。特に「ローリング・ストーン」は台詞もたくさんで場面ごとの演技分けが大変だったけど、すごく面白かったです。



西塚ひかり(中3)

1年目で大きい役をもらい、本番まで不安でした。終わった瞬間「すごいなあ。できたなあ」って。自分でもこんな大きなことを達成できるんだって、自信になりました。



鈴目那緒(yhs)

子どもの頃にお芝居をしたくても、どこかに所属するのはややハードルが高かったので、子ども演劇WSはすごくいいと思います。自分が子どもの頃にあつたら良かったのに!



長澤二瑚(中1)&瑚々(小5)

演劇がすごく楽しいし、学校以外で新しい人たちと関わることができることも楽しいです。この3年間で演技に関することはもちろん、人との関わりの面でも成長できたかな。